文献紹介

有薗正一郎　著
『農耕技術の歴史地理』
古今書院　2007年３月
Ａ４版　208頁　1,800円＋税

本書は，愛知大学文學会叢書XIIとして刊行されたものであり，第１部（第１章～第５章）と第２部（第６章～第11章）で構成されている。

第１部　環境に適応する農耕技術
　第１章　近世農書の著者の環境観
　第２章　気候環境に適応する２つの中耕農法
　第３章　農書『農業時の栞』の耕作技術の地域性
　第４章　近代初頭 奥三河の里山の景観
　第５章　村の資源循環からみた里山の役割
第２部　農耕技術論叢
　第６章　耕地の生産力を測る単位の変化について
　第７章　近世以降における農業革命の時期設定試論
　第８章　近世以降の稲の干し方の分布について
　第９章　渥美半島の稲干場
　第10章　東アジアの人力犂
　第11章　地籍図にみる近代初頭の土地利用

同書は有薗氏の６冊目の著作であり，ほぼ同時に『近世庶民の日常食』（海青社）が刊行されている。

第１章では，近世の農耕技術が1720年代を境にして前半と後半とでは性格が異なることをふまえた上で，農書の著者がどのような環境観を抱いていたかが明らかにされる。いずれも季節の運行に合わせて適時に耕作することを奨励しており，環境を所与のものととらえていたことがわかる。

第２章では，中国華北と日本の中耕農法の相違が論じられる。前者が中耕保水農業であるのに対して日本のそれは中耕除草農業であるという飯沼二郎氏の説が紹介されている。近世日本の農民に受け入れられ，農耕技術の聖典ともいうべき『農業全書』の著者が，明代末の『農政全書』では保水のために中耕が行われると記載された箇所を除草のためにそれが行われると誤読したのであった。湿潤かつ夏季高温の日本では，農作物を育てながら除草することが農法の基本であると有薗氏は指摘する。この章で同氏は，東アジアに気候環境に適応する二つの中耕農業が並存してきたと結論づけている。

第３章では，農書『農業時の栞』の著者・細井孫左衛門が，当時流布していた『農業全書』と対比したうえで三河平坦部に適合する技術を伝えようとしていることが明らかにされた。干鰯に下糞をまぜる方法などがこの農書には詳述され，畿内・瀬戸内沿岸の先進地や関東とも異なる中進地の技術水準を知ることができる。

第４章では，初版５万分の１地形図が表記する奥三河の里山の「荒地」が荒蕪地ではなく，その大半が農耕の生産力を維持するための柴草を採取する場所であったことが論証され，「奥三河における近代初頭の景観モデル」が提示されている。景観と土地利用を明らかにするためには，土地の人々からの聞き取りが欠かせないと有薗氏は指摘している。

第５章では，近世から20世紀までの村の資源循環には，村人・田畑・里山・都市住民が関わっていたことが言及されている。その関係のなかで，農民は里山に自生する草木のなかから有用なものを残した。里山で得られた柴草が，刈敷・堆肥・厩肥などに活用されたのであった。

第６章では，耕地の生産力が面積ではなく播種量・収穫量・元肥施用量などで測られてきたことに関して，それらの量を面積に換算することに拘泥した諸先学と，「塚」や「蒔」などの生産力単位が公的な面積の後に使用されたとする説などが厳しく批判されている。

第７章では，近世後半から1960年代までのおよそ２世紀半をかけて，農業革命が進行したことが試論として提示されている。その根拠は，17世紀末に新農法が創出されたことである。具体的には，適地・適時の耕作，農具（鍬と鎌）の形・使用法の多様化，肥料の施用，そして農書が書かれだしたことなど列挙されている。第二の根拠は，

農地改革によって自作農のみの農村が出現したことである。

第8章では，稲の干し方に関して論じられる，近世以降には次第に地干し法と掛け干し法とが併用されるようになり，後に営農を指導する側の奨励と強制によって後者が普及した。

第9章では，大蔵永常が『門田の栄』で奨励した，稲刈り前の落水から裏作物の作付けまでの二毛作を行うための一連の技術が19世紀中頃の三河では普及しなかったこと，ならびに稲干場が新たにできるにとどまったことなどが論証されている。

第10章では，日本・朝鮮・中国などにおける東アジアの人力犂の分布が論じられ，第11章では地籍図をもとにした近代初頭の土地利用が検討されている。

上記のような構成のもとで，各章ではそれぞれのテーマが論じられている。著者はそれらを環境と農耕技術の適応関係ならびに農耕技術論の二つに大きく括っているのである。注意深く読んでいくと，本書全体を貫くものがいくつか見えてくる。

農書の著者が広めようとした技術をどう位置づければよいかという問題に対して，有薗氏は「入れ子になっている箱」で説明できるとし，一番外側の箱が自然環境，その一つ内側に水利をはじめ共同体でおこなう人文環境，さらに内側にあるのが個々の農家がおこなう農耕技術であると述べている。農書の著者たちの環境観をこのようにとらえればよい，というのである。「あとがき」には，有薗氏自身の考え方に基づく「自然環境と農耕技術との関わりの変化模式図」がある。この図もまた「入れ子になっている箱」である。以上のことをもとに勘案すると，「入れ子」の状況で環境を理解すべきであるという主張が本書を貫く第一のものである。第1章の末尾では，近世農書の著者が持っていた環境観を今の我々も共有すれば，地域生態系の構成員として，より長く生き続けることができる，と有薗氏は述べている。

第1章で，耕作の具体的な方法の中でいつ何をどうすればよいのかということに関して「耕作に適する許容範囲は10日ほどである」と述べ，その根拠としておよそ25年間「日曜百姓を楽しんできた」有薗氏自身の経験をあげている。また第3章では，農業とは「所与の環境で，生き物を育成し管理した結果の中から余った部分を人間が受け取る生業である」と述べている。これも実際に作物を育成した経験にもとづく見解に違いない。それがもっとも顕著なのは，第8章の稲の干し方を論じた箇所である。本書のカバーにある「著者近影」が稲刈り時の姿であることをみても，具体的な農作業に裏打ちされた見解が本書を貫いていることは明らかであろう。

資料的には愛知県公文書館が所蔵する『地籍字分全図』と『地籍帳』が駆使されていることも本書の特徴かと思われる。

有薗氏によるいくつかの提言もわれわれは受け止めなければならないであろう。第5章では，里山をどうするかは「現代人が取り組むべき課題」だと指摘し，第7章では農家の高齢者に代わって山に柴草を刈りに行く組織をつくることの必要性を説いている。今，眼前にある現実といかに対峙するか，現代とどう向き合うのか。歴史地理学の課題は重いといわねばならない。

（河島一仁）